

< 今日の説教のポイント ルカによる福音書 10 章 25～37 節 >

1 (25) 「すると…試そうとして」 — 前後と関係あるルカ福音書。

直前の個所でイエス様は「父なる神様は知恵ある者や賢い者ではなく、幼子のような者に福音を示された」(21)と言われました。律法学者はそれに反発して、「偉そうに言うお前はどれだけ分かっているのか」と思って、律法学者らしく、イエス様の知恵知識を試したのでしょう。

2 (26-28) 知らないのではなく、しないことの問題性。

律法学者は「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるか」とイエス様に問いましたが、彼自身が考える答えをイエス様は聞かれて、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」と言われました。つまりイエス様は、「あなたは答えを知らないのではなく知っている。知っているのにしないことが問題なのだ」と示されたのです。問題は、ここで彼がその自分の過ちに気づくかどうかです。

3 (29, 36-37) 自分の間違いを認めようとせず、自己正当化する罪。

律法学者は自分を正当化しようとししました(18:14 参照。義とする)。自分がおかしいなと思ったときに、どれだけ早くそれを認めて(自分という城を明け渡して)神様に立ち返るか、それが大事なのです。彼はそれをせず、「では、わたしの隣人とはだれですか」と浅知恵を巡らして逃げようとししました。しかし、イエス様はたとえ話によって、「あなたが隣人となる人があなたの隣人なのだ」と示されたのです。

4 (30- 35) できない者であることに気づかされ、する者となる。

襲われた旅人を救うことをしなかった祭司とレビ人は主なる神様に仕える人であり、救うことをしたサマリア人はイスラエル人からすると「汚れた」異教徒でした。前者は病人に近づくと汚れた者となり神事の務めに当たれなくなりました(「道の向こう側を」31, 32 の意味)。この例えからそう簡単に誰が悪い、何が悪いと決めつけることはできないと思います。言い換えると、「正しい答えを知っているのに、それをしないことが悪いのだ」がこの個所の最終解答でもないと思います。もしそうならば、誰も神様の前によしとされる人はいないからです。むしろ、「知っているのにしない、できないのが自分なのだ」という、その罪に気づいた者を赦し、受け入れて下さる神様に全てを明け渡して、そこから感謝のうちに少しでも「する」ことに取り組んでいく者となる、それが聖書全体から教えられる全ての者に用意された救いの道なのです。